

タイトル	北海学園大学人文学会創立記念シンポジウム記録： 人文学の新しい可能性
著者	
引用	北海学園大学人文論集(58)：121-164
発行日	2015-03-31

人文学の新しい可能性

パネリスト	本城誠二氏 (英米文化学科教授 アメリカ文学・文化) 大石和久氏 (日本文化学科教授 映画美学) 追塩千尋氏 (日本文化学科教授 日本古代中世仏教史) 村中亮夫氏 (日本文化学科准教授 人文地理学)
司会	濱 忠雄氏
日時	2013年11月16日(土曜日)午後2時-5時
会場	図書館棟 AV3 教室
主催	北海学園大学人文学部
共催	北海学園大学人文学部, 北海学園大学大学院文学研究科

周縁からの視線

— 人文学／文学／文化をめぐる —

本 城 誠 二

本発表では文学研究から文化研究への越境から見えてくるものについて、発表者の体験を交えて紹介したいと思います。教養教育の英語を中心に担当しながら、専門としては英米文学の作家と作品について文学研究をしていました。しかし1970年代に文化そのものを問い直すカルチュラル・

スタディーズが出てきて、もともとアメリカのポップ・カルチャーに関心を持っていた事もあり、1990年代からカルチュラル・スタディーズ的な方法と内容に変えていきました。ここでは、激しく変化する社会における文化と研究の再考を通して、人文学についても何らかの考察をお示しする事ができればと思います。

まず「社会の変化と大学と研究」についてお話します。私は文学部文学科英米文学専攻という場で学びましたが、1970年代初頭は一世代上の先生方が影響を受けたニュークリティシズムが文学研究の方法として教えられていました。最終的には詩と対象をするような研究方法でしたが、作者の意図にとらわれなくて作品を読む事ができる方法として有効だったと思います。つまり作品を分析する時に、いつもその背後の作家について、その意図や経歴などを参照していた研究のあり方が、ニュークリティシズムでは作品そのものを対象とするようになりました。特に言葉を科学的に分析するのが新鮮でしたが、その方法が小説よりは詩に向いている方法であったのも事実でした。でもそこからバルトによる「作者の死」という作品＝テキストが自立するという大きなパラダイム・シフトまでもう一歩という感じで印象的だった訳です。

その時代は後からポストモダンと位置付けられましたが、当時の文学批評としては、フランスの構造主義、ソシュールの記号論が流行っていて、その流れの中で学部や大学院でも仲間や先輩と、それらの新しい知の潮流を代表するような著作を輪読していた記憶があります。その時は知りませんでした。すでにカルチュラル・スタディーズが登場していました。その先駆者的な学者としては、『読み書きの効用』(1957年)を書いたリチャード・ホガートや、『文化と社会』(1958年)のレイモンド・ウィリアムズなどが挙げられますが、いずれも労働者階級出身の知識人で、かつマルクス主義の左翼知識人でした。特にレイモンド・ウィリアムズはカルチュラル・スタディーズという研究方法とは関係なく学部で読まれていました。おそらくヴィクトリア朝時代のマシュー・アーノルドが『文化と無秩序』で主張し、後にF・R・リーヴィスが継ぐような、文化とは教養ある特権的な

少数によってのみ理解され維持されるという、高踏的エリート的な文化観から脱した 20 世紀後半の文化論として読まれ出していたのだと思います。

そしてカルチュラル・スタディーズが登場しますが、それは 1964 年パーミンガム大学に現代文化研究センター (CCCS - Centre for Contemporary Cultural Studies) が設立した時です。パーミンガムはロンドンとリヴァプールの間くらいに位置する町です。この新しい研究方法は、政治学・社会学・文学理論・メディア論・映画理論・文化人類学・哲学・芸術史・芸術理論などの知見を領域横断的に応用しながら、文化に関わる状況を分析し、対象だけでなく方法論も越境するものでした。代表的な著述の一つとして、1977 年ポール・ウイリスが著した『ハマータウンの野郎ども』が、学校教育についての聞き書き、エスノグラフィー (民族誌) の試みとして有名です。これは *Learning to Labour—How Working Class Kids Get Working Class Jobs* という原題からも分かりますように、労働者階級の若者が学校を嫌い、押し付けられるのでもなく知らないうちに労働者になるという、底辺労働者再生産の構造を明らかにしたものです。

さてこのカルチュラル・スタディーズの日本での受容についてですが、本格的導入の前にカルチュラル・スタディーズ的な文献の紹介から始まります。1968 年に『文化と社会』, 1974 年には『読み書きの効用』, 1984 年に『ハマータウンの野郎ども』, そしてディック・ヘブデージの『サブカルチャー』の翻訳が 1986 年に出ます。そして冷戦やポストモダンの「大きな物語」が終了した 1996 年には雑誌『思想』, 『現代思想』でカルチュラル・スタディーズの特集が組まれました。その大きな枠組としては、支配・権威・体制／抵抗・反体制という二項対立も含みつつ、文化と政治の関係を考えるものです。この文化と政治と言う力学がカルチュラル・スタディーズには通底していて、その政治的な主張が突出するようにも見える部分が一部の人に好まれない理由であるような気がします。

この新しいパラダイムを理解するキーワードとしては、性に関わるジェンダー、クイア、肉体に関するボディ・ポリティクス、植民地以後のポストコロニアル、サバルタン、ディアスポラ、クレオール、そしてサブカル

チャー、メディア、コンタクト・ゾーンなどが挙げられるでしょうか。アメリカ文化研究、特に黒人音楽に関心のある者としては、ディアスポラ、クレオール、そしてサブカルチャーが重要でした。もともとユダヤ人の離散を意味するディアスポラは、黒人のアフリカ大陸からの離散と重ね合わせてブラック・ディアスポラまたはアトランティック・ディアスポラという使われ方もします。またクレオールはアメリカ植民地生まれのフランス人・スペイン人を指していた言葉が、白人と黒人の混血にも使われるようになり、このクレオールはジャズの誕生に重要な役割を果たしました。またカルチュラル・スタディーズ的な観点からは、人種の積極的な横断・越境を意味する言葉としても使われます。サブカルチャーは語義の「下位文化」では、主流の文化に対するものとして、ポピュラー文化と同列にくるものですが、例えばポピュラー音楽の中の黒人音楽の、さらに下位に区分されるヒップホップなどがサブカルチャーの例といえます。

次にカルチュラル・スタディーズの具体的な実践の前に、タイトルにも掲げた周縁からの視点についてお話ししたいと思います。私は所属学部、そして研究領域において、意識的にではなく結果的に様々な周縁にいたような気がします。例えば、旧教養部における語学担当者は他の研究者からそのように見られていましたし、人文学部に移ってからそのでの文学研究は、日本文化学科における史学や英米文化学科における英語教育という中心的な研究と比較すると周縁的な立ち位置かなと思ってしまいます。北海学園大学の人文学部のみならず、アメリカ文学会ででもずいぶんと前から問題となっていた文学離れと文学研究のマイナー化というのは全国的な傾向でもありました。その中で文学研究から文化研究にシフトするのは、もしかすると社会の趨勢から中心的な場所への転換という意味になるのかもしれませんが、研究というアカデミックな視点からさらにマイナーなところへ移ってきたという自覚もあります。ともかく基本的には周縁的な場に居続けたその有効性を無理やり理屈付けると、そこには中心にいない事による開放性と、もしかすると中心にいては見る事のできない全体についての俯瞰的な視点が可能かも知れないという事です。

また文学研究から文化研究へシフトする事で、文化という概念ばかりではなく、研究そのものを問い直す視点も獲得できたような気がします。僭越ですが文学研究から文化研究への変化と、また文学研究もしているという事を明示するために研究の個人史を紹介させていただきます。変化の端境期が1994年の「出口なき探究——ポール・オースターのニューヨーク三部作をめぐって」で、これはアメリカのユダヤ人作家の作品研究でした。そして次の1998年に書いた「ハードボイルドにおける家族という神話」はロス・マクドナルドというハードボイルド小説の作家による作品からアメリカの家族のあり方を分析してみました。その後はしばらく文化的なテーマについて書いてきました。2001年は「ヒップホップという亀裂」でアメリカのポピュラー音楽の先端的な部分について、2005年の「LA ノワール、ディストピアを夢見る——映画 *Chinatown* における都市表象をめぐって」では、ノワールと言う新しいジャンル観からみる映画を都市というディストピア（反ユートピア）的な視点から考察しています。そして今年初めて『人文論集』に原稿を出した「妄想のアメリカン・ドリーム」ではハリウッド小説を題材にしていますから、文学と文化を横断するようなテーマとも言えます。さらにすでに原稿は出して発刊はこれからですが、「聖なる野生と繰り返す越境——コーマック・マッカーシーの『越境』をめぐって——」ではコーマック・マッカーシーの作品論ですからこれは文学研究で、文化研究ではありません。だからといって文化研究をやめた訳ではないので、文学研究と文化研究を往復するようなスタンスをそれなりに実行していると言えるような気がします。

さて先ほど予告しましたようにカルチュラル・スタディーズの具体的な実践の報告です。2000年に同志社大学で開催された日本アメリカ文学会の全国大会におけるシンポジウムでの発表が「ヒップホップという亀裂」というタイトルのヒップホップ論でした。これはシンポジウム全体を本にした『ポストモダン都市ニューヨークグローバリゼーション、情報化、世界都市』に収録されていますが、シンポジウムのテーマは1980年以降のニューヨークにおける文学・詩・音楽・映画について考察しようとするも

のでした。ヒップホップについてはあまりよく知らなかったのですが、黒人音楽について少しは知っているだろうという事でメンバーに選ばれたので、調べてみました。その結果、ヒップホップは1980年代のアメリカのニューヨーク市ブロンクス地区で誕生した都市の黒人のストリート・カルチャーであり、幾つもの文化的な視点からこの新しい音楽ジャンルを読むことができると知りました。それはゲットーのストリート・カルチャーとして、差別・貧困・暴力・麻薬といった黒人社会の様々な問題点を表現するものとしてのヒップホップであり、ゲットーの終末論的絶望と祝祭の両極端を表象するポストモダンの音楽でもある訳です。また同時にポスト・インダストリアル社会の都市周辺部からわきあがった声と解釈する事も可能ですし、ブラック・ディアスポラの視点もあり得ると。

またヒップホップはそれ自体がこれまでとは異なる文化の実践と考える事ができます。例えば、公園などをパーティの場として野外で踊りつつ、ストリートを公共圏に変える。音楽を自分で作るという事が持たざる者の商業主義への抵抗と抗議になる。既存の音楽を引用して組み合わせる事が、ポストモダニックな黒人音楽の創造になる。ヒップホップにおける抗議が連帯を通して黒人共同体の再構築になる、などが挙げられると思います。

さて最後になりますが、文化の力学と新人文学について考えてみたいと思います。まずカルチュラル・スタディーズは起源への疑問を出発点としていると思います。そこでは単一の主体・国家・民族などの仮想的なアイデンティティーに懐疑的なスタンスが明確にされます。そして越境的・横断的・超越的：独立した、固定的な学問分野を作らず、様々な議論の空間を広げ、inter-disciplinary と trans-disciplinary を往復するような姿勢が重要になり、自己と研究を相対化し、例えばサバルタン研究の理解不可能な他者の声に耳を傾ける事が必要になります。そこでは必然的に文化と政治による文化の力学が問題となるでしょう。つまり～文化と定義した瞬間に、～文化の中心と周縁が分けられ、そこでは支配と被支配の政治的な力学が現出してくるからです。また一方では文化の力学には、文化そのものが内包するダイナミックなエネルギーも意味しています。さらにそのような

文化を丸ごと受け止めるような研究ができれば、その文化に研究も付け加わってのダイナミクスが現出するような気がします。

そのように考えつつ、文学部で学び、教養部でそして人文学部で研究し教える者にとっての「新人文学」とはどのようなものなのか。「文学」、「文化」そして「人文学」が何なのかいつも自問しながら研究してきたような気がします。なかなか結論には至りません。人文学とはある時期学問の中心にありながら、現在では周縁にある学問分野であると言う事を考えながら、その有効性または遅効性、または役に立つ事が本当に必要なのかという事も考え続けようと思います。研究のある地点をその時点での到達点としながらもそこに居つかない。そういう営為、研究態度、生き方が総体として人文学のあるべき姿で、それはある種の新・人文学なのかもしれない、というのが現時点での私の拙い結論となるような気がします。

映像，あるいは人間を超え出る知覚について

— ベンヤミン／ベルクソン／連続写真 —

大石和久

はじめに — 問いの設定 —

まずは、ここ数年、人文学について積極的に発言しているフランス思想研究者の西山雄二の言葉から始めたいと思います。近年の社会的・文化的・経済的变化を背景として、「人文学の教育研究が今日的な妥当性 (relevance) や適切性 (pertinence)」を問われている、と西山は言っています⁽¹⁾。このような認識はわれわれの所属する人文学部においてもすでにある程度は共有されている、と私は考えています。というのも、人文学部の理念である「新人文主義」は、西山が述べるような従来の人文学を批判的に問う姿勢から生み出されたものだからです。元本学大学院文学研究科研究科長の大濱徹也は以下のように「新人文主義」を規定しています。

「新人文主義」は、人間解放の名の下に、人間が自然を征服し、人間至上が「近代」の価値であると思ひなし、人間が欲望のおもむくままに世界を支配することに道を開いた人文主義が落ち込んだ隘路を凝視し、人間が人間であるとは何かを問い質さんとするものです⁽²⁾。

このように「新人文主義」とは、人文学 (humanities) がその根本に据えてきた人文主義 (humanism) が「人間至上」の「隘路」に陥っている以上、人文主義批判に人文学の再生をかけるという一種の逆説を帯びたスローガンでした。

また、今年 (2013 年) 開催された「新しい人文学の可能性」と題した本

学部創立 20 周年記念シンポジウムにおいて、パネリストの一人、宗教学者の佐藤弘夫も、神や仏や死者を排除し「世界の構成員として人間のみが突出する近代の異形性」を指摘し、人間が至上の存在となった近代への批判に「新しい人文学の可能性」を見出していました。

実際、人文主義批判としての人文学という逆説が人文学にその隆盛をもたらしてきました。その例として、構造主義や「人間の死」を語ったミシェル・フーコーの「考古学」を挙げることができるでしょう⁽³⁾。それらによれば、人間はもはや、自らの思考や行動の源泉たる主体ではありません。人間の思考や行動を決定するのは、人間主体を超え出たところにある無意識的構造（ないしはシステム）です。

さらには、西山が人文主義批判としての人文学について次のように言っていることも注目したいと思います。「多文化主義やカルチュラル・スタディーズ、マイノリティ論、ポスト・コロニアル研究、ジェンダーやセクシャリティ論、人種やエスニシティ論といった動向とともに、旧来の人文学を支えていた人間本性が実は西洋中心主義や男性中心主義と不可分であることが批判的に暴露されてゆく……」⁽⁴⁾。従来の人文学が想定してきた人間とは決してニュートラルな主体ではなかった、というわけです。またここで、西山がこのように様々な人文学の学問分野を具体的に挙げながら、ジャック・デリダを引用し、それぞれの学問分野に応じて「人間の終焉」は「複数」あって「多元的に展開された」と指摘していることは重要であると思います⁽⁵⁾。

「人間の終焉」が「複数」とすれば、それは人文学の各分野において個別具体的な問題として検証されるべきではないでしょうか。これが本報告において設定した問いです。本報告では映画美学の立場からイメージの領域を対象に、ヴァルター・ベンヤミンの写真論やアンリ・ベルクソンの哲学を援用しながら、この問いを実践してゆきたいと思います。

19 世紀に入って、人間がその眼と手の協働によって制作してきた絵画や彫刻といったイメージの領域に、カメラという装置によって自動的に形成される、写真や映画といった機械的イメージすなわち「映像」が登場して

きます。本報告の結論を予め申しておけば、イメージの領域における「人間の死」はこの「映像」によってもたらされた、というものになるでしょう。

1 「人間の死」と「視覚的無意識」

1-1 「視覚的無意識」

まず、さきにふれたフーコーが「人間の死」を語り出すのに特権的な学問として「精神分析」を挙げていたことに注目したいと思います。人間は知の主体などではなく、自ら意識することのできない「無意識」に支配され、それに従属するものとして、精神分析では位置付けられるのです。この精神分析で語られる無意識に、イメージの領域において匹敵するものは何でしょうか。ここで、ベンヤミンの言う「視覚的無意識」を取り上げたいと思います。ベンヤミンは次のように言っています。「〈足を踏み出す〉ときの何分かの一秒における姿勢となると、誰もまったく知らないに違いない。写真はスローモーションや拡大といった補助手段を使って、それを解明してくれる。こうした視覚における無意識的なものは、写真によってはじめて知られる。それは衝動における無意識的なものが、精神分析によってはじめて知られるのと同様である」⁽⁶⁾。

肉眼が意識できない数分の一秒の世界を写真は露呈するのですが、その意識できないほど素早い瞬間を「視覚的無意識」とベンヤミンは呼ぶわけです。カメラが捉える世界は人間の意識できない瞬間を撮影するのだから、人間の意識できる領域を超え出ている、と言えるでしょう。カメラが見るのは人間を超え出る知覚なのです。これはもはや人間主体が知覚している世界ではありません。この人間を超え出る知覚、それは映画評論家で映画理論家のアンドレ・バザンの言葉を借りれば、人間「不在」の世界の眺めです。写真はカメラという装置によって自動的に形成されるので、その形成過程には人間が介入しません。それで、バザンは写真についてこう言うのです。「すべての芸術は人間の存在に基づいているが、写真においての

みわれわれは人間の不在を享受する」⁽⁷⁾。このように写真は人間的なものが欠落しているのです、他の芸術のように人間の意識に規定されることなく、逆にその無意識を露わにするのです。たしかに写真にもフレーミングやシャッターチャンスなどを通じて人間的なものが介入してきますが、像そのものは自動的に形成されるしかありません。この写真が見せる人間を超え出た人間不在の無意識の世界に、イメージの領域における「人間の死」を見ることができると思います。

1-2 連続写真とそれを引き継ぐイメージ

次に、具体的に写真作品を取り上げて、この写真における「人間の死」を考察してゆきたいと思います。

まずは、イギリス生まれのアメリカの写真家イードウィアード・マイブリッジの連続写真を挙げましょう(図1)。これは、19世紀末に世界で初めて、数千分の一秒の馬の姿勢を撮ったものです。当時の人々は初めて眼にする瞬間的な馬の姿勢を無様と感じ取り、それに驚いたと言います。このマイブリッジの写真は複数のフレーム(コマ)からなるものですが、エティエンヌ＝ジュール・マレーは継起する複数の瞬間が一つの画面に共存する写真、すなわち「クロノフォトグラフィ」を開発しました(図2)。マレー

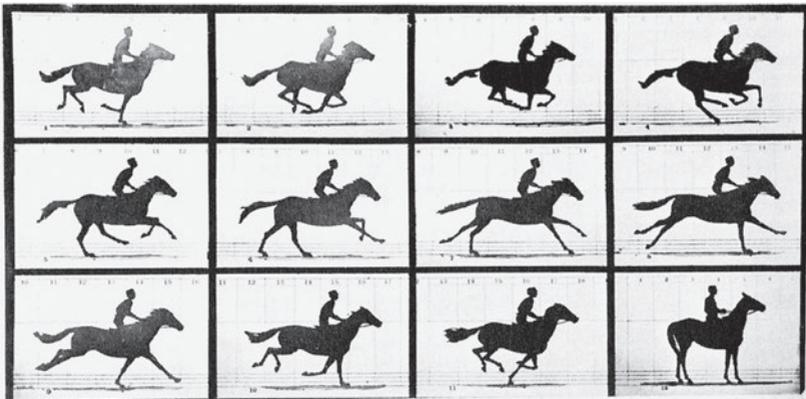


図1 イードウィアード・マイブリッジ『疾走中の馬』1878年

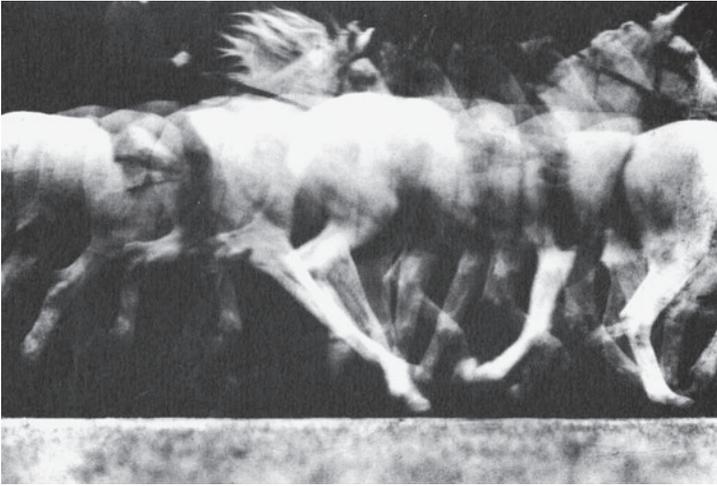


図2 エティエンヌ＝ジュール・マレー『ギャロップする馬』1886年

はフランスの生理学者で、このような連続写真を活用し肉眼では把握できない動物の運動を研究しました。フランスの哲学者で美術史家のジョルジュ・ディディ＝ユベルマンは、残像が尾を曳くようになっていくような写真を「視覚的に尾を曳くもの *traîne visuelle*」と名付けました⁽⁸⁾。ご覧になっていただければお分かりになるように、この種の写真には映画のスローモーションを見ているかのような印象を受けます。

さて、このような「視覚的無意識」を炙り出した写真は運動表象すなわち運動の描き方に大きな影響を与えます。マイブリッジの写真は、テオドール・ジェリコーが描いたような走る馬の姿勢(図3)を絵画から駆逐してしまいました。前肢は前へ後肢は後へと肢を思いっきり伸ばしながら宙を駆ける馬の姿勢は写真と異なるので誤りだ、ということになったのです。これまで芸術家の肉眼が捉え描いてきた馬の姿勢が否定されたのです(しかし、芸術家が自らの印象に基づいて描いた姿勢こそ正しい、と彫刻家のオーギュスト・ロダンはジェリコーを擁護しましたが、このことについて本発表ではこれ以上ふれる余裕はありません)。

たとえば、エドガー・ドガはマイブリッジの写真の研究し、それを巧み



図3 テオドール・ジェリコー『エプソムの競馬』1821年

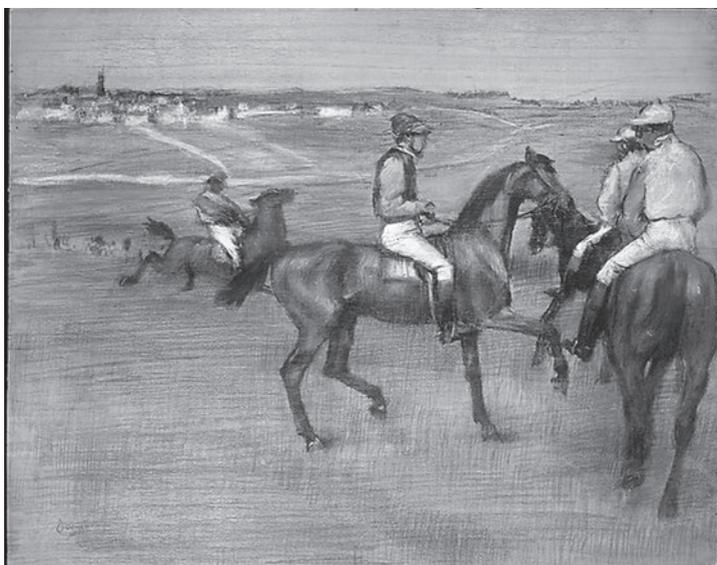


図4 エドガー・ドガ『競走馬』1885-1888年



図5 マルセル・デュシャン
『階段を降りる裸婦 No.2』1912年

に彼の絵の中に導入したことで有名です(図4)。また、マルセル・デュシャンは、マレーの残像が尾を曳く型の連続写真に触発され、キュビズム的に分割された画面に時間軸を導入します(図5)。スピードの美学を追究した未来派も、マレー型の連続写真の影響の下、デュシャンと同様にキュビズム的な画面分割に時間軸を導入しています(図6)。ここに未来派の画家ジャコモ・バッラの絵を挙げましたが、このバッラの絵からは日本のマンガ家・赤塚不二夫が描くキャラクター、たとえば「レレレのおじさん」(図7)の走る姿を思い出さないでしょうか。『マンガ学』を著したスコット・マクラウドは、マンガがデュシャンや未来派における運動表象を活用したことを指摘しています⁽⁹⁾。赤塚はおそらく連続写真を意識していたでしょうし、デュシャンや未来派も知っていたでしょう。さて、さきに連続写真はスローモーション的效果をもつと言いましたが、マンガにおける連続写

真的スローモーションの美しい例は、石ノ森章太郎の『仮面ライダー』に見ることができます(図8)。このような連続写真的表象は眼に見えないほどの素早い瞬間を描いているので、他方で、とてつもないスピードの表現にもなり得ます。そこにスピード線、すなわち対象の動きと速さを示す線を描き足せばよいのです。それだけで、仮面ライダーはものすごい早さで加速度的に落下してゆくようになります(図9)。

以上、視覚的無意識がいかに関運動の描き方を変えたかを見てきました。もちろん絵を描くのは人間ですが、人間が写真を通して人間の意識を超えた無意識の領域に接触したことが、大きく運動の描き方を変えてしまったということです。連続写真による視覚的無意識の発見がなければ、「レレレのおじさん」の走り方は存在しなかったかもしれないのです。

さて、この写真が見せる「視覚的無意識」、つまり人間が意識できないほ

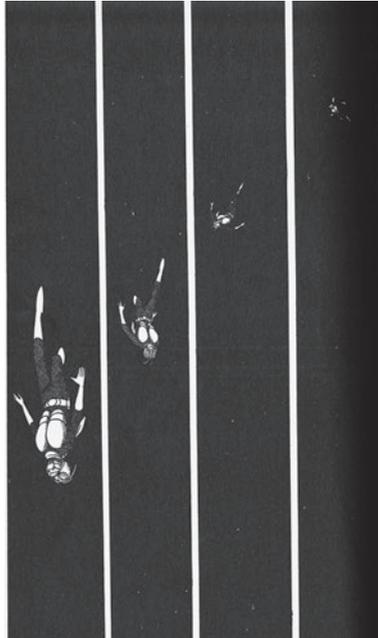


図8 石ノ森章太郎『仮面ライダー』1971-1972年、スローモーションで落下する仮面ライダー ©石森プロ



図9 石ノ森章太郎『仮面ライダー』，加速度的に落下する仮面ライダー ©石森プロ

どの素早い瞬間の本性とはどのようなものでしょうか。ベルクソンの哲学はその本性を解き明かしているように思われます。以下、ベルクソンの哲学を援用します。

2 「持続」と「視覚的無意識」

2-1 持続という実在

ベルクソンは不可分の連続的推移，すなわち「持続」を真の実在とみなしました。持続が連続的であるということは，それが単なる「量的変化」ではなく，瞬間が付け加わる毎に，全体としてその性質を変化させ続ける「質的变化」であることを意味します。それゆえ，持続とは絶えざる新しきものの湧出であると言えます。持続という実在は，古代ギリシ

アにおいて真の實在と呼ばれた永遠不変の本質、すなわち「アイデア」とは全く異なるのです。近代に発明された連続写真は、瞬間毎に絶えず変化してゆく運動の姿を見せてくれます。それゆえ、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズはこう指摘するのです。この連続写真という近代的イメージは古代ギリシア的な永遠不変の本質すなわちアイデアなどではなく、絶えず更新される實在すなわちベルクソンの言う持続を表象しているのである、と⁽¹⁰⁾。実は、ベルクソン自身は連続写真については否定的見解しか述べていません(しかし、この点について本発表ではこれ以上ふれる余裕はありません)。ですが、ドゥルーズはそれでもなお、さきに述べたような理由で連続写真が持続の表象であり得る、と説きます。この事態を「人間の死」とどう関係づけて捉えることができるでしょうか。このことについて考えるために、ベルクソン自身がその著書『笑い』において論じた芸術論を以下援用したい、と思います。

2-2 ベルクソンの芸術論(『笑い』より)

ベルクソンによれば、芸術の機能は事物の「一般性」ではなく「個別性 *individualité*」を示すことにあります⁽¹¹⁾。通常、人間は自らの生の利害関心に関わるものにだけ注目を向けるために、事物から「有用な印象」しか受け取りません(ベルクソンにとって人間とは本来的にプラグマティックな存在です)⁽¹²⁾。その結果、「人間にとって無用な差異は消し去られ、人間にとって有用な類似は強調される」こととなります⁽¹³⁾。この「無用な差異」が事物の「個別性」であり、「有用な類似」がその「一般性」に他なりません。しかし、芸術家は自らの生に背を向けることのできる特別な存在であるがゆえに、「人間にとって無用な差異」すなわち事物の「個別性」を看取り、それを作品化することができます。それゆえ、芸術は差異に満ちた實在を「露呈する」と言えるのです⁽¹⁴⁾。この「人間にとって無用な差異」ないしは「個別性」とは、絶えず変化し続ける持続という實在の有様を指すでしょう。ベルクソンは言っています。「画家がカンヴァスの上に定着するものは、画家がある場所、ある日、ある時刻に再び見られないであろう色

で見たものである」⁽¹⁵⁾。

日々の生活に追われる人間は、自らの生にとって意味あるものにはか注意を向けず、刻々と変化する細やかな異なりを深く味わうことはないでしょう。日常生活にとって、そのようなことは不必要なのです。しかし芸術が露わにするのはそのような繊細な差異であり、それこそが真の实在、すなわちリアルなのである、とベルクソンは言いたいのです。連続写真について言えば、人間は、馬が走っているだいたいのかたちが分かればそれでよい。数千分の一秒の世界を見て取る必要はない。人間は、それで生きてゆくのに不自由はしないというわけです。しかし、カメラはそのような繊細な差異を写し取ってしまう。なぜでしょう。

2-3 カメラと無関心

それは、端的に言えば、カメラは生への意志をもたない単なる物質であるからでしょう。物質でしかないカメラは生きる必要性から解放されているがゆえに、人間にとっては無用な微細な差異を掬い取ることができるのです。言ってみればカメラは「無関心」なのです。つまり、カメラは生の利害関心から解き放たれているからこそ、それに囚われてしまっている人間が見過ごしているような、差異に溢れかえる世界のリアルな姿を露呈することができるのです。

おわりに

イメージの分野において「人間の死」を押し付ける一例として、「視覚的無意識」を炙り出す瞬間写真を、本報告では取り上げました。いままで見てきましたように、ベルクソンは、芸術に、自らの生の利害関心に囚われた人間にその限界を乗り越えさせるような契機を見ていました。ベルクソンは、芸術は人間の知覚を拡大させる、あるいは芸術は人間の「知覚能力の拡張 *extension des facultés de percevoir*」である、と言っています⁽¹⁶⁾。メディア学者のマーシャル・マクルーハンは、メディアは「身体能力の

extension」であると述べました。マクルーハン研究者の柴田崇によれば、マクルーハンの言う extension には「拡張、外化、延長」の三つの意味があります⁽¹⁷⁾。ベルクソンはこの場合、芸術に関して extension を「拡張」の意味で用いている、と言えるでしょう。映像は言うまでもなく一つのメディアです。この映像というメディアが身体能力の「拡張」であるということ を指摘することで、本報告を終えたいと思います。

註

- (1) 西山雄二(編著)『人文学と制度』, 未来社, 2013年, 7頁。人文学の現状については、ジャック・デリダ『条件なき大学』(西山雄二訳, 月曜社, 2008年), およびエドワード・E・サイード『人文学と批評の使命——デモクラシーのために』(村山敏勝他訳, 岩波現代文庫, 2013年)も参照のこと。
- (2) 大濱徹也「新しき飛躍の場として——『年報 新入文学』刊行によせて」, 『年報 新入文学』第1号, 北海学園大学大学院文学研究科, 2005年, 2頁。
- (3) ミシェル・フーコー『言葉と物——人文科学の考古学』(渡辺一民他訳, 新潮社, 1974年)の第10章「人文諸科学」を参照のこと。
- (4) 西山, 前掲書, 11頁。
- (5) 同書。
- (6) ヴァルター・ベンヤミン『図説 写真小史』久保哲司編訳, ちくま学芸文庫, 1998年, 17-18頁。
- (7) André Bazin, “Ontologie de l’image photographique” (1945), *Qu’est-ce que le cinéma? 1, Ontologie et langage*, Cerf, 1958, p. 15. (アンドレ・バザン「写真映像の存在論」小海永二訳, 『映画とは何か』[小海永二翻訳選集4], 丸善, 2008年, 188頁。)
- (8) Georges Didi-Huberman, Laurent Mannoni, *Mouvements de l’air, Étienne-Jules Marey, photographe des fluides*, Paris, Gallimard, 2004, pp. 242-243.
- (9) スコット・マクラウド『マンガ学——マンガによるマンガのためのマンガ理論』岡田斗司夫監訳, 美術出版社, 1998年, 116-117頁。
- (10) Gilles Deleuze, *Cinéma 1-L’image-mouvement*, Paris, Minuit, 1983, p.17. (ジル・ドゥルーズ『シネマ1*運動イメージ』財津理他訳, 法政大学出版局, 2008年, 15頁。)
- (11) Henri Bergson, *Le rire*, 1900, p.460. (『笑い』鈴木力衛・仲沢紀雄訳, 白

- 水社, 1965年, 117頁)。アンリ・ベルクソンの著作からの引用はすべて Henri Bergson, *Œuvres* (1959), Édition du Centenaire, Paris, PUF, 1991 による。
- (12) *Ibid.*, p.59. (邦訳, 116頁。)
 - (13) *Ibid.* (邦訳, 同上。)
 - (14) *Ibid.*, p.461. (邦訳, 119頁。)
 - (15) *Ibid.*, p.464. (邦訳, 122頁。)
 - (16) H. Bergson, *La pensée et le mouvant*, 1934, p.1371. (『思想と動くもの』 矢内原伊作訳, 白水社, 1965年, 172頁。)
 - (17) 柴田崇『マクルーハンとメディア論——身体論の集合』(勁草書房, 2013年) の第5章「エクステンションの系譜学」を参照のこと。

人文学としての歴史学

～日本宗教史研究を素材に～

追 塩 千 尋

1

シンポジウムのテーマとして掲げられた「人文学の新しい可能性」を切り開く上で歴史学はどのような役割を果たし得るのかという関心に立ち、2013年5月に行われた記念シンポジウムの議論（論点の一つに学問の総合化の必要性が強調されていた、と受け止めました）も踏まえて考えてみます。

歴史学は旧一般教養科目においては、社会科学科目群に分類されていました。しかしながら、史学科は通常は文学部に置かれ、人文科学の一分野とも位置づけられています。このように、対象とする分野によっては自然科学も含む多分野性に歴史学の特質があると思われれます。そうしたことを念頭に置き、具体的には筆者が取り組んでいる日本宗教史研究を素材に、近年顕著になっている脱領域的研究の活発化という傾向を確認し、そこから学び得ることを導き出し、人文学部の今後に果たすべき（果たし得る）歴史学の役割、という課題に迫ってみたいと思います。

2

本学の人文学部は日本文化・英米文化の2学科で構成され、旧来型の歴史学・文学・哲学などからなる講座制をとってはいません。そのため、それぞれの専門分野を掘り下げて深めていく、という部分がカリキュラムの上ではこれまではどうしても希薄でした。2014年4月からスタートした新

カリキュラムでは特論などの新設や早い時期からの演習履修などで一定の改善が目指されていますが、一方では両学科の垣根を出来る限り取り払った両学科共通の科目群（人文学概論、人文学演習など）を設置したこともひとつの特質となっています。専門を深める道が一定程度保証されていますが、学生は従来以上に学際的・脱領域的学習が求められ、指導に当たる教員もそうした側面への模索が必要とされていくことになりました。しかしながら、そのことの具現化は恐らくは容易ではなく、運用面でも試行錯誤がしばらく続くことが予想されます。ただ、その具現化には歴史学がある程度寄与できそうです。なぜなら、歴史学は本来脱領域的性格を有した学問と思われるからで、次に筆者の宗教史研究の経験も交えながらそのことを述べてみます。

3

前項で学際・脱領域という語を使用しましたが、以前は「学際」研究といった言葉をよく見かけました。しかし、近年は「学際」の語はあまり目にするのがなくなりました。代わりに「脱領域」「越境」「境界領域」「周縁」などの語が使用される傾向があり、そうした名称が付された研究書類も増えているようです。用語にこだわるわけではありませんが、「学際」という場合、さまざまな学問分野が協力していますが、共同研究と同様の寄り合い所帯・寄せ集めの傾向が濃厚で、必ずしも専門を超えた融合的な成果が示されていたわけではなかったといえます。その点「脱領域」の場合は専門性は保持されていますが、従来の専門にこだわってはい取り組まないと思われる対象に取り組んでいる点や、他分野の研究成果を積極的に消化する姿勢が見られる点などに「学際」とは異なる特色があるといえます。

本学の人文学部を構成する学科の名称として冠せられている日本文化・英米文化という学問は本来無いため、学部開設時から学際・脱領域と専門性との関係に苦慮し、模索を続けてきました。その模索は今後とも不断に

続けられていくでしょう。

4

ここで、少々大上段になりますが「歴史学」という学問の特性について考えてみます。歴史学は過去の人間の営みを対象とするもので、その営みを便宜的に政治・社会経済・文化の分野に分けて研究し、その総体を通史として叙述することを最終目標とした学問、といえます。しかしながら、一研究者が各分野に平均的に通暁することは容易なことではなく、実際には専門は細分化されて研究が進められています。そのことはともかく、歴史学は本来は総合大学的素養が必要な学問であることが知られると思います。

日本において西洋スタイルの近代的歴史学が成立する以前、歴史学に近い学問は誤解を恐れずに言いますと本居宣長らにより確立された国学であったと思われます。宣長は国学の対象を「神学・道の学問・有職の学・史学・歌の学び」などとししました(『うひ山ぶみ』)。この定義を現在の学問分野に置き換えますと、古代史・言語学・文学・思想史・宗教学・書誌学・民俗学などになるかと思われます。まさに国学は、人文学部の基本的な構成要素である哲学・史学・文学を兼ね備えていた学問であることが知られます。歴史学の母体が国学といえるのなら、歴史学は人文学部の学問そのものといえることになります。それは言い過ぎかもしれませんが、例えば幕末・維新期の国学者伊達千広が『大勢三転考』(1848年)なる日本通史を著したことの意義はもっと追究されてよいのかもしれませんが。

当初国学はこれらの要素を統合していたのですが、一個人がすべてを体現するのは稀で、徐々に各要素が分化して今日の歴史学などの学問となっていくます。分化していく境目となる時期は、物集高見(1847~1928)や芳賀矢一(1867~1927)らの昭和初期辺りで、山田孝雄(1873~1958)が最後の国学者といえるかもしれませんが。彼らは通常は国学の系譜を引く国文学あるいは国語学者に分類されていますが、実際の業績はそれらでは分

類しきれない分野に及んでいます。

さて、ここでまた歴史学の問題に戻りますが、人間の政治・社会経済・文化の営みの中で総合的素養が要求されるのは文化史であると思われます。一口に文化史とはいっても、その内容は思想・宗教・学問〈江戸期からは文系・理系・医系などさらに細分化〉・文学・芸能・芸術・工芸・教育・風俗など文字通り多岐にわたっています。これらの分野はかならずしも歴史学を専門としない研究者により、それぞれの立場から研究が進められている分野でもあります。政治・社会経済・文化の三分野すべてに通じることは容易ではありませんし、その中の一分野とはいっても文化史分野の大変さは推して知るべきでしょう。

5

近年筆者は脱領域的研究に関わる書評、あるいは書評的論文に取り組む機会がありましたので、話を具体的にするためにもそのことに触れたいと思います。書評文の掲載誌や内容のポイントなどは次の通りですが、詳しくはそれぞれを参照してください。

①上横手雅敬『権力と仏教の中世史』（『史学雑誌』119-6, 2010年6月）

本書は歴史を時代史として総合的に捉えるためには政治史の中に文化史を取り入れる必要があるとして、思想・仏教・文学（和歌・説話・歴史物語など）・美術（彫刻・絵画）などのことに触れています。

②船田淳一『神仏と儀礼の中世』（『史学雑誌』121-2, 2012年2月）

本書は寺院圏に伝来する仏教・神祇の儀礼にかかわる聖教を対象とし、儀礼の諸相を通して顕れる中世的な神・仏の宗教世界に迫ろうとした書です。新ジャンルの史資料である寺院聖教を歴史学の立場ではありますが、文学・仏教学などの脱領域レベルの視点から消化して研究した成果が反映されています。

③「日本仏教通史の枠組み——『新アジア仏教史』日本編刊行に寄せて——」（北海学園大学『人文論集』51, 2012年3月）

『新アジア仏教史』(2010～2011年)を素材に、旧『アジア仏教史』(1972～76)との比較を通じて日本仏教史の通史の課題を考えたものです。ここでは『新』の特色として、歴史学・文学・仏教学・美術史などの多分野の研究者による協力がなされていることを指摘しました。

④「日本宗教史の構図——新体系日本史『宗教社会史』に寄せて——」(北海学園大学『人文論集』55, 2013年8月)

新体系日本史『宗教社会史』(2012年)と旧体系日本史叢書『宗教史』(1964年)を比較し、日本宗教の通史の課題を考えたものです。『旧』は日本宗教の中でも教義・組織ともに整ったもの(仏教が中心となるが)を中核におき、それらを寄せ集めた宗教史となっています。『旧』の課題は色々ありますが、日本・日本人にとって宗教とは何であったのか、という問いが不足しています。

一方、『新』は社会に溶け込んだ宗教の姿を描くことにより『旧』の課題の克服が目指されています。異なる宗教の寄せ集め、といった印象を避けるためか教義・哲学は取り上げてはならず、そのために書名が『宗教社会史』になったとも思われます。『新』には豊富な各論が設けられており、そこで取り上げられたテーマに脱領域的方法(日本人にとって宗教とは何であったのかという問いへの解答)が最もよく顕れています。それらのテーマを列挙しますと、寺社と社会・権力との関係、金融・信用に関して機能した仏教の権威、寺院のアジール性、宗教の持つホスピタリティ、女性と宗教、葬送と墓制、人間が集う場(市場など)と宗教施設や宗教者との関連性、などになります。

なお、他人の研究書の書評ばかりでなく、筆者自身のこれまでの脱領域的といえる取り組みは、『日本中世の説話と仏教』(1999年)及び『中世説話の宗教世界』(2013年、いずれも和泉書院)にまとめてありますので参考にしてください。書名からは国文学の書という印象をもたれるかもしれませんが(実際に通常の書店では歴史書の棚には配架されておりませんし、図書館でも同様のようです)、歴史学の立場から史料としての説話文学の有効性を探るとともに、説話を通じて中世における仏教信仰の内実に迫ろう

とした試みです。文化史の一分野である宗教史に取り組んだものですが、国文学の研究成果に大きく依拠しています。

6

まとまりのない中途半端な文章になりましたが、様々な専門分野の成果を総動員して進めねばならない歴史学の分野が宗教史であることを述べたつもりです。そのことは歴史学が本来総合的なものであり、学際あるいは脱領域であってもそれらの領域を推進するのにふさわしい性格を有した学問であることに関係しています。そうした性格ゆえ、専門に特化しないカリキュラムを掲げた人文学部においては、基幹的な科目になり得るのではないかと思われまます。だからといって、歴史学が「諸学の王」であるというつもりはありません。他の学問にも濃淡はあっても、脱領域的対象に関わりうる要素があると思われまます。今回の人文学部のカリキュラム改訂の一つの方向性（あるいは特質）が脱領域にあるとし、そして策定したカリキュラムが文字通りその目的を果たすためには各専門領域はどのように参与しえるのか、ということについてそれぞれの立場から発言しかつ具現化を進めていくことが必要と思ひまます。

2015年から開始される人文学演習においてどのように学生を啓発し学習効果を高めることが出来るか、という点が差し迫った当面の課題となります。各教員にとっては自己の専門との関係が問われることになり、「脱領域」を目指すうえでの最初の試金石となるでしょう。

〈付記〉

報告当日は時間の制約もあり、省いたところも多く結論などが曖昧なことも含めて極めて中途半端な報告となりました。シンポジウムから一年経過して文章化してみても不十分な状況は変わらないのですが、当日の報告よりも多少は肉付けしてみました。

また、当日頂いたいくつかの質問・コメントのうち、あまり日本の事を

強調するのはいかなものか，といった類のこともありました。報告者の能力から日本に即したものになりましたが，学部カリキュラムの課題に關しましては多少普遍化できるのでは，と思っております。

地域に学ぶ人文学

村 中 亮 夫

1 はじめに

本報告では、地理学の立場から、これまで本学部の教学で中心的な役割を担ってきた哲学、歴史学、文学、言語学を中心とする人文教育において、新たに地理学的な物の見方や考え方、そして地理学的な方法論がどのように活用できるかについて話題を提供したいと思います。『2014 北海学園大学大学案内』ご覧いただくと分かる通り、本学部は2014年度からの新カリキュラムにおいて、「言語研究や哲学・歴史学・文学などの文献研究」を中心に据えつつも、「フィールドワーク（以下、FW）や実地研修」による教育を展開し、人間が「自然ならびに他者との共生を実現するような、新しい人文学的な知のあり方」を探求することを明確にしました。この知的活動を本学部では「新しい人文学」ないしは「新人文主義」と呼び学部教育カリキュラムにおいて具体化すべく、新カリキュラムにおいては専門科目を「言語文化」「思想文化」「歴史文化」「環境文化」の4つの科目群に分けました。そのなかで、地理学は「環境文化」科目群に分類されています。

2 地理学とは

地理学は、地理学の方法論や学史、考え方を議論する原論と、具体的な研究対象を分析する各論から成ります。各論は系統地理学と地域地理学から成り、前者の系統地理学は地形や気候などの自然現象を研究対象とする自然地理学と、政治や経済、社会などの人文現象を研究対象とする人文地理学に分けられます。系統地理学が対象とする分析対象は非常に多岐にわ

たるため、対象に応じて地形学や気候学、経済地理学、社会地理学、政治地理学などの下位領域が設けられています。これらの下位領域は、それぞれ地質学や気象学、経済学、社会学、政治学などの系統的な諸学問領域と密接に関連しています(ハーツホーン1957)。また、地域地理学は地誌学とも呼ばれ、ある特定の地域に着目し、当該地域の自然や経済、社会、政治など、様々な側面から地域の特性を明らかにする、系統地理学と対をなす学問領域です。

たとえば、環境問題に対しては、環境経済学や環境社会学、環境史などの諸学問領域からアプローチされていますが、地理学ではそれらの諸学問領域の特に地理的な側面に着目した研究が取り組まれています。具体的に、公害問題を考えると、環境経済学では公害による社会的な損失、また、環境社会学では公害の加害-被害関係に着目した研究が考えられます。この問題に対して、地理学では、公害がどの地域に広がり、それらの地域はどのような条件(e.g.汚染源からの距離、自然環境など)にある場所なのかを議論することが考えられます(ピンチ1990)。このように、地理学は「地域」や「場所」「距離」「環境」などをキーワードとする「地理的なものの方の見方・考え方」に基づく「考え方の学問」なのです。

地理学における分析資料は、哲学、歴史学、文学、言語学において分析資料として用いられる文献資料のみならず、地図や写真・映像、統計、実験・観測データ、被験者(インフォーマント)の意識・語りなど、様々なデータが用いられます。これらのデータは、図書館での文献収集や研究室内での実験等を含むインドアワークではなく、多くの場合、研究室外に出てデータ収集を行うFWを通して得られます。具体的には、質的データについては文献・地図・写真等の資料収集や参与観察・聞き取り等の質的社会調査、また、量的データについては実験・観測・計測等の自然科学的なデータ収集やセンサス・社会統計等の統計資料収集、世論調査等の統計的社会調査を通して収集されます。

こうして収集されたデータは、質的アプローチと量的アプローチから成る地理学的なデータ分析の方法によって分析されます。前者の質的アプ

ローチには文献・地図・写真等の解釈や参与観察・聞き取り調査データの質的分析、後者の量的アプローチには実験・観測・計測データや統計データの統計分析、地理情報システム (GIS: geographic information systems) によるデータ分析 (空間分析) が含まれます。GIS とは、様々な地理情報を、位置情報を持つデータ形式で保存し、それらの情報を検索、分析、表示できる一連のコンピュータシステムです。たとえば、『京童』や『洛陽名所集』をはじめとする近世期に発行された名所案内記には、近世京都の様々な名所が文字・絵画の形式で収録されています。GIS では、これらの情報は、行方向を場所 (e.g. 清水寺, 金閣寺, …, m), 列方向を名所案内記 (e.g. 京童, 洛陽名所集, …, n) とする行列 (地理行列と呼ぶ) の形式に基づいて、 m 番目の場所が n 番目の名所案内記に掲載されているか否かを 1, 0 などの 2 値の数値で判別できるよう整理されます (塚本 2006)。そして、これらの情報は、地図上において、点・線・面の図形データとして表現されます。

3 人文研究への地理学的な方法論の応用

このように、地理学においては様々なデータ分析の方法が利用されています。本報告では、これらのなかでも、哲学、歴史学、文学、言語学を中心とする人文学であまり用いられないことがない分析資料である地図や、資料収集方法である FW、データ分析の方法としての GIS の人文研究における可能性について、災害史研究を事例に紹介します。

風水害、地震災害、火山災害、火災など、過去に発生した災害 (歴史災害) の実態や災害に対する人間の対応を歴史的な視点に基づいて検討する研究領域は災害史研究と呼ばれます。災害史研究の目的は、①歴史災害の復原や災害の発生要因の検討 (被災実態の復原)、②歴史災害の発生時または発生後の人々の対応の復原 (災害対応の復原) にあります。そして、最終的には、被災実態 / 災害対応の復原を通して、今後の防災計画 / 事業に活用できる情報、すなわち “減災の知恵” を抽出することが目的となりま

す。災害史は分析資料として過去の地図や絵画、文献資料を通して復原する必要性から、すぐれて人文的な研究課題であると同時に、被災場所／範囲の特定という地理情報を扱うことから地理学的な研究課題でもあります。本報告では、災害史研究における地理学的な方法論の可能性を考えるために、具体的に、近世期の京都において発生した複数の大火による被災範囲の復原を地理学・歴史学・建築史の専門的な知見に基づいて考えた塚本ほか(2012)の研究成果を紹介します。

近世期の火災による被災範囲を復原する基本的な資料としては火災図があげられます。火災図とは火災による被災の範囲や状況を描いた図の総称であり、活字に印刷製本された刊本や、その写本、現代の新聞の号外の前身ともいべきかわら版などの形式で作成されています。これらの火災図には被災範囲を示した地図が描かれていますが、近代的な測量技術に基づくものではないため、これらの被災範囲を正確な測量に基づく地図に描写するためにはGISを用いて精度の高い復原図を作成する必要があります。ただし、火災図は行政文書やかわら版など、多様な目的に基づいて作成されているため、それぞれの火災図に示されている地名や被災範囲の正確性に、どうしても差が生じます。この問題を解消するために、文献資料やFWを活用した被災範囲の検証作業が必要となります。

文献資料としては行政文書や日記、物語などがあげられ、これらの資料からは具体的な被災場所に関する情報が得られます。また、FWで得られる情報としては発掘調査や聞き取り調査、現地調査に基づく情報があげられ、必ずしも時系列的・地理的に網羅的なデータが得られるわけではありませんが、データの正確性は高いと考えられます。このように、火災図とともに文献資料やFWから得られる情報を勘案すると、尤もらしい近世京都における各大火の被災範囲が復原されます(塚本ほか2012, 図2)。

これら復原された各大火の被災範囲と各大火からの被災を免れた建造物の分布図を重ね合わせると、それらの建造物が各大火の焼け止まった場所に位置している傾向が読み取れます(塚本ほか2012, 図3)。たとえば、二条城は寛文13年、宝永5年、元治元年の大火で、西本願寺は天明8年、元

治元年の大火で、本隆寺は享保15年、天明8年の大火でそれぞれ延焼が止まり鎮火点となりました。このなかで、西本願寺では天明の大火の際に境内に現存する火伏銀杏（水吹き銀杏）が水を吹いて御影堂を火災から守ったとされる伝説が残されています。また、本隆寺は享保の大火・天明の大火の際に本堂に安置されている鬼子母神の靈験によって延焼が免れたとされ、「不焼寺」の異名を持ちます。

このように、二条城、西本願寺、本隆寺など、延焼が止まり鎮火点となった城・寺に着目すると、それぞれの敷地内には広い空地が存在していることが分かります。つまり、これら敷地内の空地が防火帯としての役割を担い、それぞれの場所において延焼が食い止められたのかも知れません。この知見は、都市内における防火帯の重要性を示唆しており、“減災の知恵”として現代的な都市計画においても活用の可能性があるとも言えます。

4 新しい人文学的な学びと地域連携に向けて

以上のような災害史研究を見ても、これまで人文学で採用されてきた文献学的方法論に地図・FW・GISの活用を加え、防災計画や防災・安全まちづくりなど、地域連携／貢献を探る新たな人文学の可能性も考えられます。これまでも人文学においては自治体史の編纂や市民講座の開催、博物館活動の支援、初等中等教育との連携など、地域貢献活動が行われて来ました。ここに地図・FW・GISを新たに活用することにより、人文学における知的活動を通して地域連携／地域貢献に新たな可能性を見出すことができます。ここでいう地図・FW・GISを用いた人文学的な地域連携／地域貢献の新たな可能性としては、学生・地域住民・行政・教員間の交流を通じてはじめて実現可能な、①地域情報の収集力の強化、②地域での人的交流の活性化、③地域情報の分析／発信力の強化が想定され、ひいては直接的・間接的にも、地域の課題解決や学生の学びの場の多様化にも寄与すると考えられます。

ここで、報告者の研究グループがこれまで京都府亀岡市と連携して取り

組んできた安全安心マップ作成のワークショップ(WS)の取り組みを紹介いたします。このマップ作成のWSは、地域住民が一方的な情報の受け手になるのではなく、実際に地域を歩き災害や事故、犯罪の危険箇所について調べることで、WS参加者の安全安心に対する関心や危険回避能力の向上や、地域内での安全安心に対する関心の向上を通して身近な地域の様々なリスクを低減させる効果が期待できる住民参加型の取り組みです。亀岡市での取り組みでは、これまでマップ作成のWSに地域住民とともに学部生・大学院生にも参加してもらい、WSを学びの場としても活用してきました。

マップ作成のWSは、FWとインドアワークによって構成されます。まずFWでは、グループごとにクリップボードにはさんだ地図を持って地域の危険箇所を探して歩き、見つけた危険箇所を地図上に記すと同時に、危険の種類(災害、事故、犯罪等)に応じて色分けされた付箋紙に危険箇所についての具体的な内容を記入して地図に貼り付けます。各危険箇所については、状況を示す写真を撮影します。次に、インドアワークでは、模造紙の大きさに拡大した地図上に、FWで得られた情報を記入したり撮影した写真を貼り付けたりします。模造紙大の地図が完成したら、WSの当日は各グループ同士の情報を共有すべく、成果発表会を開きます。

WS終了後、これらグループワークで作成された地図に掲載された情報はGISを用いてデジタル化されます。その過程で、それぞれの場所に関する情報は、行方向を場所(e.g.○○交差点, △△駅前の道路, …, m), 列方向を場所に関する属性情報(e.g.地点コード, 地区, 危険の種類, 危険の内容, …, n)とする地理行列として整理され、地図上においては点・線・面の図形データとして表示されます。デジタル化されたデータは印刷業者を介して用紙に印刷され、住民に配布されます。配布された地図は普段目に留まる冷蔵庫や部屋の壁などに貼ったり、家族や地域住民同士で危険箇所に関する意見を交換したりして活用されます。ここで得られた情報はWebマップとしても配信され、インターネットに接続されていればどこでも閲覧できます(<http://shinocho.heteml.jp/shino/shino2dx.html>)。

以上のように、人文学的な研究課題の1つである地域の安全安心について、地図・FW・GISを活用するとできることを学習者である学部生・大学院生の視点から考えると、以下のように整理できます。第1に、地域の危険箇所を調べるFWでは、地域住民の方々との交流を通じて地域を知ることにつながります。ここでは地図の読み方(読図)や聞き取り調査をはじめとするFWの手法を学ぶことができます。第2に、FWで得られたデータをGISによってデジタル化する作業では、コンピュータリテラシーを向上したり地図作成の技術を修得することになります。第3に、紙地図ないしはWebマップとして作成された安全安心マップの使いやすさを地域住民に実際に聞く作業では、マップが安全安心まちづくりにどの程度貢献できるかを検討します。ここでは、紙地図・Webマップの使いやすさを住民の皆さんに直接聞くことを通して調査の方法を修得すると同時に、地図を活用した安全安心まちづくりのありかたを学べます。

5 おわりに

本報告では、これまで哲学・歴史学・文学・言語学を中心とする人文学で採用されてきた文献学的方法論に加えて、人文教育において地図・FW・GISをはじめとする地理学的方法論がどのように活用できるかを紹介しました。こうした取り組みは、学生の学びの場を拡大させ、多様な学びの体験をもたらすものと思われます。先般、地誌学受講生のグループ3名を空知地方の炭鉱遺産をめぐるFWに連れてまいりましたが、そのうちの1人からはFWの意義として「文献資料にはない、現在の人々の生の声を聞ける」(本学日本文化学科・2年生)という声をもらいました。また、本学部では長年「日本文化演習」「国際文化演習」の授業によって学生をフィールドに連れて行き現地で学ぶフィールドでの体験型学習の実績もあります。これら授業の報告書である『日本文化演習報告書』『国際文化演習報告書』には学生の学びの成果が見られますが、これらを見るとFWを通して“文化”が実際の地域でどのように生きているかを肌で感じられたとの声が

多いようにも思います。こうした地域における学生の学びの場の創出は、直接的／間接的に地域振興や地域の課題解決に寄与できると思われます。さらに、FWの手法自体が汎用性の高い学問的な手法であることから、たとえば異なるゼミ合同でテーマを決めてFWをするなど、人文教育における授業内容の多様化に貢献できます。このことは、フィールドを媒介に、新しい人文学の研究課題でもある自然・他者との共生を探究する機会を創出してくれるものと思われます。

最後になりますが、本報告で紹介した近世京都の大火に関する実証分析は塚本ほか(2012)に基づくものであり、安全安心マップの取り組み事例は村中ほか(2012)や村中ほか(2013)をはじめ報告者の研究グループがこれまでに取り組んできた成果の一部を整理したものです。本報告にあたり貴重な資料を提供していただきました塚本章宏先生(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部)に感謝申し上げます。

文 献

- 塚本章宏「近世京都の名所案内記に描かれた場の空間的分布とその歴史の変遷」GIS — 理論と応用 14-2, 2006, 113-124 頁。
- 塚本章宏・中村琢巳・谷端郷・赤石直美・麻生将・崎田芳晴・長尾泰源・股座真実子・片平博文・吉越昭久「近世京都における大火被災域の時空間的復原」歴史都市防災論文集 6, 2012, 17-22 頁。
- ハーツホーン著, 野村正七訳『地理学方法論 — 地理学の性格 —』朝倉書店, 1957, 155 頁。
- ピンチ著, 神谷浩夫訳『都市問題と公共サービス』古今書院, 1990, 92 頁。
- 村中亮夫・瀬戸寿一・谷端郷・中谷友樹「Web 版安全安心マップの活用意思とその規定要因 — 利用者評価による分析 —」地理学評論 85, 2012, 492-507 頁。
- 村中亮夫・谷端郷・米島万有子・湯浅弘樹・瀬戸寿一・中谷友樹「住民参加型安全安心マップ作成のワークショップが環境介入に与える影響 — マップに記載された情報に着目して —」地理科学 68, 2013, 114-131 頁。

全体討議

質問・質疑応答

○司会（濱忠雄氏，元北海学園大学教授） それでは討論に移ります。パネリストの皆さんからご質問があればお申し出ください。

○大石 私から、ほかの3名の先生にご質問ですが、私以外の先生方のお話では、学際的とか、脱領域的な問題が共通の話題として出てきたと思います。村中先生の災害のお話もそうですし、さまざまな学問の領域の人々が集まって一つ何かなし遂げる時に、学際的とか脱領域的とかいう問題が出てくるのだらうと思ひまして、その件についてのご見解をお伺いしたいなと新人文とのかかわりで思ったのです。

○司会 それでは、追塩先生から。

○追塩 脱領域については、説明は一応したつもりではありますが。これからの人文学部の可能性を切り開く道として、やはり横とのつながりが大事で、横断的なつながりというのは、それぞれ学生にしても、教員にしても必要であろうと思っています。それを具現化するには、一体どうしたら良いかという問題で私はお話ししました。

○村中 私は、追塩先生のご発表を聞いていて、歴史学における時間的な視点と、地理学における空間的、ないしは地理的な視点とを同時に加味することで、歴史学と地理学に学際的な接点を見出せると思いました。例えば、追塩先生が題材にしておられた中世説話を話題にして、実際に現地を歩くフィールドワークを実施し教育や研究を展開する、そういった可能性をもし議論できたらおもしろいと思いました。

○本城 僕は、大石先生の発言について聞きたいことがあります。例えば追塩先生がおっしゃっていた、脱領域はもしかすると中途半端になって寄せ集めになってしまうと事はあると思います。ただ僕が先ほど紹介したような、ハリウッドを描いた小説を分析するとき自然に脱領域しているのです。つまり、ハリウッドという映画のメッカを舞台にした小説ということで、映画と文学というふうな、分野を越境的に横断的に俯瞰的にまたぎながら研究しているという気はします。

○**司会** ありがとうございます。質問紙をいただいた中からお願いしたいと思います。本城先生にお二人から「ハンドアウトの文化の力学と新人文学の点に関して、その文化の力学は文化そのものに内在する力学ですか、それとも文化研究の力学ですか。前者であるとすれば、カルチュラル・スタディーズは、それを解き放すということになると理解してよいでしょうか」とのご質問がありました。

○**本城** 文化の力学というのは、土屋先生のおっしゃるように文化そのものにある種の力学は存在していると思います。例えばヒップホップで言うと、ニューヨークのブロンクスで誕生しましたけれども、すぐに西海岸に波及したり、またはフランスや日本・韓国へもヒップホップという文化はダイナミックに移動しています。ですから文化そのものの力学をきちっととらえるのが、カルチュラル・スタディーズではないかと。その研究のスタイル自体も、その文化のダイナミクスをとらえるようなスタイルだと思えます。

○**土屋（土屋博氏、元北海学園大学教授）** ありがとうございます。それは、もしそうであるとするならば、インターディシプリナリーからトランスディシプリナリーへというこの矢印が気になりますが、これは果たして一方的な矢印になるのでしょうか。

最近、日本あるいは世界の宗教研究の中で、非常に問題になっている宗教概念を再考しています。したがって先ほどの話との連関でいきますと、宗教文化概念には、実はインターディシプリナリーとトランスディシプリナリーの両方あると思うのです。これは確かに宗教という従来の概念を越えようとはしますが、もちろん宗教だけ否定するわけでは決していない。そしてさらに周辺のぼけた領域を非常に大事にしながら、何か問題をつかみ出そうという試みだと。したがって、この一方的な矢印は説明いただく必要があると思えます。

○**本城** おっしゃる通りだと思います。文学研究から文化研究に移ってきましたが、でも文学研究もするという風に双方向に考えているのです。このインターとトランスも、矢印両方であったほうが良いと私も考えます。

○**司会** ありがとうございます。それでは別の質問に移らせていただきます。土屋先生から大石先生に対して、「人間を越えている知覚という表現には既に人間についての一定の理解を前提しているのではないのでしょうか。人間には、みずからをとらえ切ろうとするイメージを絶えず破り越える性格を本性以上持っているのではないのでしょうか」というご質問がありました。いかがでしょうか。

○**大石** 土屋先生のおっしゃる通りで、人間がとらえられないものを映像がとらえているということなのです。だからもし人間的なものを前提としないとするならば、人間以前の経験、人間不在の経験と言っても良いのだらうと思うのです。例えば、映画評論家のアンドレ・バザンは、初めてイメージの領域において、映像が登場したことで人間不在の光景を我々は目の当たりにすることができたと言っています。

○**土屋** ありがとうございます。わかりました。研究方法つまりメソッドが対象を切って切り分けていくというのは、実は対象自体は非常にダイナミックな形で動いていて、メソッドでこちらに近づこうとしても十分に切り抜けられないようなものがあるということ、むしろ大事にするというのが最近の考え方ではなかろうかという気がするのです。つまり、人文学、新人文を学問として、今後一種の方法としてやっていこうと考えると、それ自体を狭めてしまうような可能性はあるのではなかろうかと。いつもそのわからないものに向かって自分が開いていく事を人文学は大事にしているから、その手がかりとし、映像が考えられるのかどうかということをお聞きしたい。

○**大石** 私も人文学について問いを投げかけることで、そこに何かしらの可能性を見出したいと持っております。人文主義の批判という逆説の中に人文学の再生があるのでないか。それを個別的に映像ということで考えると、今日発表したようなことが言えるのではないか。僕は先生のおっしゃることを実践したつもりであったのです。

○**司会** ありがとうございます。差し当たりはそういう応答ということに

とどめさせていただきます。他にご質問はございますでしょうか。

○**郡司(郡司淳氏, 北海学園大学教授)** 追塩先生に伺いたいと思います。レジュメに、歴史学の特質として過去の人間の営み全てを対象とするということが書かれていますが、これは過去の無数の事実全てを、その対象とするということには恐らくならないのだと思うのですね。そうすると、歴史学というのは、現在から見て有用な過去、あるいはあるべき社会、未来から見て有用な過去を取り上げるのではないかと思うわけです。要は、歴史学は人間を描き出してこられたのかという問題。今、歴史離れというのは、過去を学ぶことが現在を理解することにならないのではないかというか、一体過去を学んで何になるのだという、そのような素朴な疑問があるのではないかという気がします。そういった点で、もう少しこの問題をわかりやすく説明していただければと思います。

○**追塩** 確かに、歴史というのは、過去の人間の営みの中から必要だと思われることを歴史家が史実として選んで構成していくということですから、少し言葉足らずではありました。それで人間の営みというのは、便宜的に政治とか経済とか文化とかに分けていますけれども、その総体が人間ということになると思います。ただ、今までの歴史というのは、政治とか社会経済を軸にするのが主流であって、文化の面というのは手薄であったという批判は免れない。文化という多岐にわたっているものをとらえることが大変ではあるというのが発言の趣旨でした。

○**司会** ありがとうございます。他にご質問はありますか。

○**柴田(柴田崇氏, 北海学園大学教授)** 技術というか方法論・論理の問題ですけれども、技術とサイエンスの発展によって、カメラのスピードを落とすことによって、あるいはハイスピードによって人間の知覚を拡大して、より見えないことが見えるようになってきたんですね。

○**大石** おっしゃる通りで技術の問題です。しかしそれをアートの領域にまでどう導くかとなると、やはり人間の手がどこかで加わってくるのだと思います。その人間的なもの人間を越えたものの接合の中に新しいアー

ト、その技術に支えられたアートがあるのだらうと思います。その技術の進歩に対応した新しい人文学があり得るのであって、このようなあり方が、人文学に今求められているのだと思います。

○司会 主に先生方からの質問に答えるというような形で進んでいるわけですが、学生の皆さんも大学院生の方もいらっしゃる。どんな議論がされているかということ自体が勉強になるということもあるかと思うのです。これどうしてだらう、何だらうというふうに思われたことをぜひ質問していただきたい。安酸先生の質問に移ります。

○安酸(安酸敏眞氏, 北海学園大学教授) 今日、人文学が学問の世界で、まさに周縁化しています。そこに、私たちが人文学の新しい可能性ということ議論する出発点もあると思います。やはりそこは科学技術の進歩が人文学というものを追い抜いてしまって、今や人文学というのは窓際族のようになっているわけです。

そもそも14世紀中ごろ以降16世紀ぐらいにかけて人文学が起こってきますよね。でもその人文学というのは実は神学というものを体験して出てくるのです。神学の行き過ぎ、あるいは神とかというものが前面に出過ぎ、人間性というものがどこかその隠れてしまったような状況が続いて、その反動として人間が表に出てくる。でも、それがどんどんどんどん近代になってくると、やがてその神を排除するような形の人間中心のあり方というものが、いつか今度は人間が不在であるような状況をもたらしてきているわけです。そういうことに対して、人文学はどうあるべきなのかについて、もう少し何か語っていただきたい。

○司会 いかがでしょうか。どなたでも結構です。

○大石 現在、映画研究はものすごく盛んになっています。僕が学生のときは、映画研究はまさしく周縁でしかなかったのですが。今では、映画研究はスタンダードで、オーソドックスな学問みたいなふうに思っている学生が多いのだらうと思います。きょう僕は漫画も使いましたが、現在はさらには漫画やアニメの研究も盛んになってきています。そう考えると、学問

の領域では盛り上がり気味の人文学も、他方で映画や漫画やアニメのような今まで周縁的であった分野を取り込むことで、盛り上がりを見せているのも確かなのです。新しい人文学の可能性は、こんなふうに今まで取り扱わなかった分野へと視野を広げることにあるのではないのでしょうか。

○司会 ほかの方、どうぞ。

○追塩 私と本城先生の報告が関連あるというご指摘があったのですけれども、私のほうでは脱領域に類する言葉として周縁という言葉があるという理解は持っています。つまり何か中核があって、その周辺部に人文学が位置づけるという意味ではなくて、人文学は中心にあるのだけれども、その周縁部、いわゆる別な言葉で言えば、隣接諸科学と昔は言った言葉ですけれども、それとの関連というものを、その垣根を取り払って研究していくという方向性は脱領域という言葉であらわされる。その周縁という言葉、もっと積極的に、人文学が周縁に置かれているということではなくて、今の隣接分野との関連をどう考えるかという、そういう理解もできるのではないかと思います。

○本城 僕は周縁というか、端っこにいるのが好きなのでついそう言ってしまうのですけれども、それをネガティブにとらえない方法もあると思います。確かに安酸先生がおっしゃったように、ヨーロッパの大学は周縁から始まって、同時に法学や医学も始まっていて、有用な学問とそうでない人文的な学問と並行してあるような気がします。中心と周縁ということで言えば、人文学は有用性の中心にはいないけれども、もっと大きな視点での学問や知の世界では中心にいと視点を変えてもいいという気がします。

○司会 ありがとうございます。もう一つ、人文学部のカリキュラムとの関連、橋渡しに関するご質問がありました。パネリストとしては、本城先生、追塩先生にご質問ということです。

○本城 僕は人文学部ではまだ新米なので、カリキュラムに学部理念がどのように反映されているか分からないのです。例えば文化研究入門とい

うのは、15回の授業の中で、各学科のいろいろな分野を研究されている方がご自分の専門の話をされますので、これ分野横断的な科目かなという気がします。

あともう一つ、ある日文の先生と飲みながら話したのですけれども、日文のその方のゼミと僕のゼミとで、学生がお互いのゼミを見学したりできればいいという話をしていました。これもある意味では、カリキュラムに入っていないくても、教員同士の相互の交流で、研究分野を横断するような内容について学生は学べる気がします。とりあえずそんなことです。

○追塩 既存の科目を有効に使って、そういう方向を目指すということも可能であると思います。以前総合科目のようなものをつくって、いろいろな分野の先生方が寄り集まって講義をしたことがあります。ただ、その形態は必ずしも成功したとは言えないこともありました。有効に行うのであれば数人ぐらいで打ち合わせを重ねて、1回やるごとに反省会を開くような形で、あるテーマのもとに、複数の先生がそのテーマで講義をしていくといったようなことの試みをやっていかなければ、本当のものにならないだろうとっております。

それから、現代では、例えば文学と歴史というのは学問分野では分離していますけれども、もともとは分離してなくて一体のものでありまして、やはり文学というのは歴史そのものというふうに考えられていた。近代に入っても、国史大系という歴史の史料集があるのですけれども、その中に多くの文学作品が入っているのですね。逆に言えば、古典文学大系シリーズの中にも、多くの歴史の史料が入っているのはその名残なのかなとっております。ですから今でも歴史とか文学とか分けてはいますが、本来はそういうふうに分けるものではないだろうとっております。

○司会 ありがとうございます。残念ながら時間が切迫してまいりましたので、この辺で討論を終わらせていただこうと思います。今回のシンポジウムを企画する際に、大石先生とお話しした記憶がありますが、次回もまた同じような形式で人文学部の他の先生方や学生の皆さん、あるいは大学院生の皆さんにご登壇いただき、それぞれ研究しておられることと新人

文主義がどう結びつくのかというようなことを発表していただくというのも大いにあって良いのではないかと思いました。

私は来年3月で退職しますが、そのような機会があればまた出てきて一緒に討論したいと思っております。長時間にわたりましたが、何はともあれ無事シンポジウムを終えることができ安堵しております。本日はご参加いただき、どうもありがとうございました。

(文責：本城誠二)